

この論考は、「現代思想」（青土社）2018年10月臨時増刊号VOL46—16より、著者・出版社の許可をいただいで転載したものです。

三次元系統樹としての仏教

佐々木 閑

生物界は生命誕生以来、長い時間をかけて分岐を繰り返し、きわめて複雑な系統樹を構成してきたが、仏教の歴史も同じような構造を持っている。生命の場合、（宇宙からの飛来説は別として）単一の原初生命から出発して、遺伝子の作用によって同一性を保持しつつも、変異と淘汰によって別種を生みながら次第に多様化し、一つの巨大な閉鎖世界を形成してきた。その全体を三次元的にモデル化するなら、過去の一起点から時間軸を上へ上へと分岐が繰り返されることで猛烈な多様化が進む、立体的系統樹となる。

特徴は二つ。一つは、途中で絶滅した系統がきわめて多いという点。分岐して、一定期間存続し、そしてそこで途絶える、という形態が至る所に見られる。今現在の生物種の多くも、そういった「絶滅の未来」を背負いながら今を健気に生きている。

もう一つの特徴は、分岐はあるが融合はない、という点。別々の種が、融合して一つ

の種へと収束するということはあり得ないので、系統樹はひたすらに分岐するだけで、異なる系統がくっつき合っ一本になるというかたちは、見られない（微生物界にそういった現象が存在する可能性はあるが、今は例外視しておく）。生物の系統樹は分岐と絶滅によって形成されているのである。

仏教の歴史も、スケールの点では桁違いに小さいものの、これとよく似た構造をとる。ただそこに、分岐だけでなく融合も起こるといふ点が違っている。

仏教における起点は、いうまでもなく釈迦である。2500年前の古代インドにおいて、釈迦という人物が、仏教という特殊な精神世界を創成した。そこが仏教の出発点となる。その後のおよそ2000年間の歴史は不明であるが、伝説によると、僧団規則の扱いをめぐって仏教界が大きく二系統に分裂し、それがさらに20あまりに再分裂した、とされている。ただ、この伝説の信憑性には保証がない。多くの仏教書では、それをあたかも史実であるかのように語っているが、それは他に利用すべき資料がないからであって、資料自体は伝説の域を出ない。

しかし重要なのは、仏教が本当に、20から30の系統（これを「部派」と呼ぶ）に分裂したという事実である。これは、実際に残っている部派所属文献や、考古学的遺物によって確認される史実である。つまり、伝説が語るようなプロセスで分岐したかどうか

かは全く保証できないが、伝説が示すように、仏教は間違いなく数十の部派へと分岐した、ということである。

これだけならさほど複雑な話ではない。古代インドにおいて仏教が2、30の部派に別れたというだけの話。部派毎に多少の違いはあっても、「釈迦の教え」という枠組みで全体を俯瞰すれば、単一系統として見ることも可能である。

しかし釈迦からおよそ500年、つまり今から2000年ほど前に大転換期が来る。大乘仏教の発生である。釈迦は、個々人が仏道修行の道を一步づつ歩んでゆくことで煩惱を断ち切って悟りを開き、最終的には完全消滅の状態（涅槃）に入って究極の安楽に達する、と説いた。地道な出家修行の道だけが仏教の本筋なのである。

これに対して新たに現れた大乘仏教は、その悟りへの道を、様々なアイデアを駆使して簡易化しインスタント化し大衆化した。その様々なアイデアというのは、単一の個人が案出したものではない。紀元前後から後、5、600年の間に、異なる場所の、異なる世界観を持った人たちが、それぞれ別個にアイデアを生み出し、それを「釈迦直伝の聖典」という建前で文書化した。その総体を我々は「大乘經典」と呼ぶ。よく知られている「般若経」「法華経」「無量寿経」「華嚴経」「大日経」「金剛頂経」といった大乘經典は皆それぞれが、別個の教えを説く別系統の聖典である。

大乘仏教というのは単一の系統を指す言葉ではない。釈迦本来の「自助努力による修

行一筋の道」に、なんらかの神秘的補助機能を付加することで、より効率的でより汎用性の高い「悟りへの道」を提示する個々別々の活動の総称である。したがって、大乘仏教の内部にも多数の系統がある。

大乘仏教が付加されることで、仏教の系統樹は一挙に複雑化する。釈迦より500年後、釈迦を起点とする2、30の部派の系統に上乘せするかたちで、新たに多数の大乘仏教の諸系統が加わってくるのである。もともとの部派の系統と、新たに登場する大乘仏教の系統の、正確な接続関係はよく分かっていない。一昔前は、大乘仏教は本来の系統樹とは別のところ（つまり僧侶とは関係しない在家者の世界）から現れた全く新奇な宗教運動だという説が有力であったが今は否定されている。やはり大乘仏教も、釈迦を起点とする系統樹の内部に位置づけられるものである。しかしその正確な位置づけが未だにできていない。

おそらくは本来の部派の系統樹の複数の異なる地点で、それぞれに異なる内容の大乘思想が生み出されたのであろう。それらは思想的には従来の伝統から逸脱する新奇な系統ではあったが、人的には従来の部派に属していながら独自の思想グループを形成する内部構成員による活動であった。系統樹で言うなら、本来の部派の系統樹の骨格はそのままでありながら、その樹幹の色が変化していったということである。本来の系統樹の幹の色が黒であったとするなら、大乘仏教の発生以降の系統樹においては、黒のまま

伸びて分岐する部分もあれば、次第に黒からグレーへと幹の色を変えながら伸び続ける部分もあるということである。

こうして大乘の登場によって複雑化の度合いを増した仏教系統樹であるが、そこには生物界の系統樹とは違って、融合という現象も含まれる。仏教が本質的に精神活動の一種である以上、本来別個の系統であったものが止揚されて、新たなアイデアへと発展するということは十分にあり得る。分岐だけでなく融合も起こりえるという点で、仏教の系統樹は生物の系統樹よりも複雑性の度合いは高くなっているということがいえる。

部派の系統と大乘の系統が微妙なかたちで重なり合う仏教系統樹は、仏教がインドの外に流伝し、南はスリランカから東南アジア、北は中国・チベット、そして朝鮮半島を経由して日本へとひろがる中で一層多様化していく。インド由来の仏教が親株となり、それぞれの地域でその変異形が子株として生み出され、それがまた次の孫株を生む、というかたちで多様化が進んだのである。代表例は、インド伝来の多様な仏教思想に刺激されて中国で発生した禅宗であろう。

こうして形成されてきた仏教系統樹を、2018年段階で水平に切断した、その切断面が現在の仏教世界である。釈迦を出発点として分岐と融合を繰り返し、途中で多くの系統を絶滅によって失いながらも、確実に増大してきた多様性の、その最新の状態がそ

ここに現れている。強調しておくが、このような異様な多様性は仏教独自のものであって、他のいかなる宗教にも見られない。部派の分裂、大乘の発生といった、仏教特有の事件が起こったことによって生じた、特異な現象なのである（これらの事件の詳細については、佐々木閑『本当の仏教を学ぶ一日講座―ゴータマはいかにしてブッダとなったのか』NHK出版新書、および『別冊NHK100分de名著 集中講義大乘仏教』NHK出版において詳説）。だからこそ、数ある宗教の中でも特に仏教だけが、多様性という面で生物界との類似性を持っているのである。

さてそれではここで、「仏教とはなにか」という問いを考察してみよう。「仏教とはなにか」と問うなら、答えは、「今述べてきた三次元系統樹、それが仏教である」ということになる。「それでは分からん。言葉で言え」と詰め寄られたなら、「全体を言葉で説明することなどできません。特定の視点、切り口から見た現れを、限定的に語ることはできません。そういった限定的な説明を積み重ねていった先に、全体的イメージとしての系統樹があなたの心中に構成されたなら、それが仏教を理解したということになります」と答えざるを得ない。立体的系統樹の全体を、一挙に他者の頭脳にコピー、ペーストすることなどできない。「生物界というものを言葉で説明せよ」という課題が実行不可能であるのと同じである。仏教を語るということは、その系統樹のある特定の部位について限定的に語るか、あるいは系統樹の全体を、漠然とした抽象語で大雑把に語るか、

どちらかであって、全体を正確にきっぱりと記述することは本来的に不可能なのである。仏教を語ることの困難さについて念入りに述べてきたが、それは、このことが仏教を話題にする場合の必須の了解事項だからである。たとえば論者が「仏教では」といった文言で切り出す場合、今言った系統樹の構造を理解して言う場合と、理解なしで言う場合とは信憑性が全く違ってくる。

理解している人ならば、「仏教では」と言った時、その仏教なるものが系統樹のどの領域を指示対象としているかを承知して言っているのであるから、内容は限定的であり史実性の裏付けを具えている。それに対して、仏教の全体構造を知らぬ論者が「仏教では」と言い出すならば、それは往々にして、論者が接する近辺の仏教世界を無批判に仏教全体にまで拡大解釈するものであったり、あるいは自分の信奉する系統を無理矢理一般化して、元祖釈迦牟尼にまで強引に結びつけて権威化を図ったりするものであることが多い。そういった言説が世に多く蔓延しているため、情報を受け取る側は、論者毎に全く異なる仏教観を押しつけられて混乱する。仏教は分かりにくいという世評の原因の一つはここにある。仏教を語る側が、その本質的構造を理解せずに語るところが問題なのである。

したがって、仏教に関する言説においては、論者が正しい歴史認識を持ってそれを提示しているかどうか、信憑性を判断する鍵となる。系統樹の中に正しく自分の立場を

位置づけようとしているかどうか、一系統にのみ見られる個別の信条を仏教全体にまで拡大適用していかないかどうか、そういった点に注意しながら見ていくことで、仏教の姿を公正かつ客観的に理解することが可能となるのである。

（以上の論述はすべて、仏教を知的、論理的に理解しようとする人への指針である。特定の系統のアイデアを絶対的に信奉し、他の教えを仏教として許容しない強固な信者にとっては、私の言葉は無意味で愚かな学者のたわ言と映るであろう。それもまた、仏教世界の実態を理解するための重要な現象である）

「現代社会において、仏教はいかなる意味を持つか」という、本号のテーマに関して、ここまでの考察から明らかかなように、「現代社会において、どの系統の仏教が、いかなる意味を持つのか」というかたちで問わねば意味がない。たとえば釈迦の時代の最初期仏教は以下のような特性を持つ。

「最初期仏教の特性」

超越的救済者がいないという現実の中で、生きる苦しみから逃れるため、各自が瞑想という心的スキルを利用して自己の内部構造を改変する（これを「煩惱を消す」と言

う)。そして極端な善行や悪行から生じる業のパワーを減衰させ、二度と生まれ変わる
ことのない絶対的消滅状態に入る（これを「涅槃に入る」と言う）。この道を実現する
ために、瞑想修行者は必ず集団生活の組織を形成し（これを僧団あるいはサンガと言
う）、一切の生産活動を放棄し、世間からの厚意だけを抛り所として、修行三昧の暮ら
しを送る。世間からの厚意で生きるためには、世間との軋轢を起こしてはならず、自分
たちの生活内容をすべて外部にオープンにし、真摯で虚偽のない姿勢を表示しなければ
ならない。

この状態を恒常的に維持するためには各メンバーの日常を厳格に統率する必要がある
ので、そのための法律集として「律」と呼ばれる巨大な法体系が存在する。サンガは、
この律による絶対的法治主義によって運営され、その組織継続期間は2500年を越え
る。

この、最初期の仏教が示す活動原理を現代社会にも応用できるのかと問うなら、答え
はもちろんイエス。いくらでも応用できる。

煩悩を消すための修行のプロセスはそのまま、苦しみやストレスでくたびれた現代人
の心を転換するための対症的カリキュラムとして役立つ。絶対的消滅を究極の目標とす
る生き方は、果てなき欲望の充足に疲れ果てた人たちに新たな生き方を提示する。一切

の生産活動を放棄して、修行という生き甲斐にすべてを投入するサンガのあり方は、宗教世界に限らず、自己の人生目標を追求するためにただ一筋の道をひたすら歩みたいと願うすべての人たちのモデルとなる。そして、その修行三昧の生活を実現するために世間からの厚意に全面的に依拠し、そのかわり世間に対しては清廉無垢な姿勢を堅持するという理念は、税金などの社会的恩恵で運営されるあらゆる組織が、その支援を断たれることなく安穩に永続していくための最も大切な要点となる（もちろん、購買者の好感によって支えられる一般企業の組織論としてもあてはまる）。

他にも、細部に立ち入れればいくらでも現代社会に応用できる「生き方の指針」はみつかる。ただし、いうまでもなくそれらは、系統樹の根っこにあたる最初期の仏教から得られる知見である。系統樹の別の箇所には焦点をあてれば、また全く別の思想、理念が見えてくる。そしてそれは、最初期仏教とは異なる意味合いで現代社会と関連し、違った応用点を提示する。「現代社会において、どの系統の仏教が、いかなる意味を持つのか」という問いの答がそこそこに現れてくるのである。

「仏教は宗教といえるのか」と問われることがよくある。その場合も、系統樹のどの部分について問われているのかを確認しなければならぬ。「あなたは仏教のどの箇所について質問しているのですか」と問い返して、もしそれが最初期の釈迦の仏教につい

ての問いであるなら、絶対存在も外的救済者も認めず、因果則だけで動いていくこの世の中で、自己修練によって真の安樂を目指すという釈迦の教えは、通俗的な意味での「宗教」には含まれないのであるから、「仏教は普通に言う宗教とは別物です」と答えることになる。しかし同じ問いが、系統樹の後期部分、大乘仏教のいくつかの系統に向けてのものであるなら答は逆になる。阿弥陀という慈悲の権化の存在を信じ、その救済に身をまかせる浄土信仰や、宇宙原理としての大日如来と、自分という個別存在の同一性を自覚することで大いなる安心の境地を得る密教思想などは「正真正銘の宗教」ということになる。

仏教は、合理性を基盤とした非宗教的世界から、純然たる救済者信仰の世界まで、様々な世界観の複合体である。「現代社会における仏教の存在意義」は、その複合体から、各人がそれぞれの状況に応じて独自に見いだしていくものである。初めから一義的に存在意義が決まっているわけではない。現前に在るものから、いかにして滋養となるエッセンスを取り出すか。それは各々の裁量に依る。この意味で仏教は、「汲めども尽きぬ智慧の泉」となるのである。

（ととととととと　　しずか・仏教学）